

水稻栽培情報 5月号

令和8年4月27日

J A 柳 川
南筑後普及指導センター

1 播種準備

(1) 種子消毒

JAから配布された種子は、農薬が粉衣されています。(種子に青色の着色)

消毒済み種子は、浸種することで効果を発揮します。種子重量の4倍の水に消毒済種子をゆっくりと浸します。

(2) 浸種

浸種は、籾から芽が少し出る時期(鳩胸程度)まで行います。浸種期間の目安は、種子消毒の期間を含め4~5日程度です。芽が伸びすぎると、播種時に芽を傷めるため注意が必要です。また、ムラが出ないように、浸種時の袋はできるだけ小分けにし、浸種期間中は1日に1回水の交換を行います。

2 播種

育苗日数が20日の場合、播種量は乾籾140~160g/箱程度です。育苗日数や移植時期から逆算して播種期や播種量を調整します。

育苗日数が長くなる場合、播種量を減らして苗が老化しないようにします。

3 育苗

播種後は、カビや病害の発生を防ぐため平床出芽を行います。

寒冷紗を2重に被せ、5~7日程度(苗長3~4cm)で1重にし、その後2~3日程度(苗長4~5cm)で完全にはがします。寒冷紗をはがす際は、日中を避け涼しくなった夕方に行います。

灌水について、2重被覆期は1日1回を目安に、その後は苗の生育に応じて回数を増やします。過度の灌水は生育を阻害するため注意します。

なお、「元気つくし」、「実りつくし」は、「ヒノヒカリ」と比較して伸びやすい特性があるため、寒冷紗は早めに除去します。

4 土づくり

代かき前に、ミネラルG(ケイ酸と鉄分の補給)やカキテツ(ケイ酸と鉄分の補給)、ケイ酸加里(ケイ酸と加里の補給)、アヅミン(腐植酸の補給)、土力の素(腐植酸と加里の補給)等の土壌改良材を投入して、健全な稲づくりの下準備を行います。

5 施肥

過剰分げつや籾数過剰による粒の充実不足を防ぐために多肥栽培は避けます。

「実りつくし」は、地力の影響を受けやすく、過剰に施肥すると倒伏の危険性が高まるため、稲作こよみの施肥基準を必ず確認し、多肥とならないように注意します。

詳細はこよみを参照してください。